研究紀要論文抄録

大学入試センター試験の英語問題で測られる学力とリスニング・テストで測定される言語運用能力の能力推定値を介した関係性の検討

－試験問題の事後標準化とリスニング・テストでの問題提示順序の影響の検討と共に－

研究開発部試験環境研究部門　内　田　照　久

研究開発部試験作成支援研究部門　中　畝　菜穂子
（現職：新潟大学　大学センター）

研究開発部試験作成支援研究部門　石　塚　智　一

大学入試センター試験における，年度間での試験成績の相互比較を目的として，項目反応理論（ＩＲＴ）に基づいた尺度化による事後標準化を試みた。大学１年生を対象とし，過去のセンター試験問題を用いて，共通受験者法と共通項目法を組み合わせたモニター試験形式の実験を行った。その結果を基に，複数年度の英語問題の項目パラメタ推定，水平的等化を行った。得られた項目パラメタに基づいて，実験に参加した被験者の能力推定値（θ）を算出して検討したところ，平均得点率で６ポイントの困難度の差が生じた異なるテスト冊子間の試験成績についても，良好に補正できることが示された。

次に，解答順序や解答時間が，実施の手続き上，拘束される英語リスニング・テストにおいて，問題の提示位置，同一話者による発話連続が，試験成績に与える影響を検討した。実験の結果，いわゆる筆記試験とは異なり，リスニング・テストでは，問題提示順序や話者の連続性は，項目困難度などの特性に，必ずしも著しい影響は与えないことが明らかになった。

また，聴覚障害者に対して，リスニング・テストの代わりの代替的な試験の実施を行うことなどを検討するための基礎資料を得るため，ペーパー・テストでの成績とリスニング・テストでの成績の関係性を検討した。本実験で被験者が受験した両方のテストの成績について，それぞれの能力推定値（θ）を用いて関係性を分析した。その結果，ペーパー・テスト成績とリスニング・テスト成績の関係の強さは，相関係数にして0.65ほどであった。この結果は先行研究とほぼ同等の値であり，またセンター試験での筆記試験型の同一科目の再テスト時や，入学試験での１次試験と２次試験での同一科目での成績の関係の強さと，ほぼ同等であることが見出された。